

原始社会における教育

—— ドゥルーズ＝ガタリ『アンチ・オイディプス』に基づいて ——

森 田 裕 之

L'Education dans les Sociétés Primitives

—— D'après *L'Anti-Œdipe* de Deleuze-Guattari ——

MORITA Hiroyuki

1 問題提起

ドゥルーズ (G. Deleuze) とガタリ (F. Guattari) の主著『アンチ・オイディプス』は、二つの企てとして読み解くことができるだろう。すなわち第一の企ては、精神分析に対する批判であり、第二の企ては、第一の企てである精神分析の批判に基づいた社会理論の構築である。

まず最初に、精神分析に対する批判について考えてみよう。ドゥルーズ＝ガタリによれば、無意識とは、生産する無意識、すなわち「欲望する諸機械」(machines désirantes) として捉えられる。欲望する諸機械とは、母の乳房に子どもの口が吸いつき、ミルクの流れを採取するように、ある器官と別の器官とが接続することである。また口に胃がつながり、口の中の流れを採取するように、別の器官とさらに別の器官とが接続し、諸器官の接続は、線形状に伸びていくことになる。この諸器官の接続としての欲望する諸機械は、一つの全体的な人物として統一化されることがなく、絶えずばらばらの諸部分として存在し、相互に接続を行っているのである。この自由で多様な接続、それが欲望する諸機械である¹⁾。

しかし精神分析は、無意識を、精神分析家の診療室で形成された父－母－私(患者)のオイディプス三角形の中に閉じこめられた無意識として捉え、神話や悲劇や夢や幻想の中で表現された無意識として捉えている。すなわち精神分析は、生産する無意識としての欲望する諸機械を、表現された無意識によって置き換えることによって、不当にも無意識を歪めてしまっているのである。このようにドゥルーズ＝ガタリは、精神分析が捉える無意識を欲望する諸機械と対立させることによって、精神分析を批判するのである²⁾。

次にドゥルーズ＝ガタリは、精神分析を批判した上で、精神分析が捉える無意識と対立する欲望する諸機械の概念に基づいて社会理論を構築する。諸器官の自由で多様な接続としての欲望する諸機械は、野放しにしておけば、あらゆる方向に走りだしてしまう。したがって社会の任務は、このアナーキーな欲望する諸機械を野放しにせず、社会の土台の上に登録することである。欲望する諸機械を登録するとは、欲望する諸機械を社会の土台の上に規制し、安定化させることで

ある。また、欲望する諸機械を登録する社会の土台とは、諸部分としての欲望する諸機械に対する一つの全体であるが、諸部分を統一化する全体ではなく、諸部分の傍らにあり、アナーキーな諸部分をわがものとして拘束し、管理する全体である。社会は、欲望する諸機械を登録する土台の種類にしたがって、原始社会、専制国家、資本主義という三つに分類され、定式化される。すなわち原始社会は、欲望する諸機械を「土地」(terre)という土台の上に登録する。また専制国家は、欲望する諸機械を「専制君主」(despote)という土台の上に登録する。さらに資本主義は、欲望する諸機械を「資本」(capital)という土台の上に登録する³⁾。

以上のようにドゥルーズ＝ガタリは、欲望する諸機械という概念を使って、資本主義と密接に結びついた家族主義の精神分析を批判し、その上で欲望する諸機械との関係にしたがって、原始社会、専制国家、資本主義から成る社会理論を構築するのである。

そこで、『アンチ・オイディプス』における第二の企てである社会理論によって切り開かれた視点に立ち、その社会理論を利用することによって、教育を語るができるだろう。すなわち、ドゥルーズ＝ガタリが提示した三つの社会に対応した三つの教育を取り出し、個々の教育を考察することができる。その上でそれらの教育を比較し、それらの差異を測定することができる。また以上の考察から、近代の資本主義に対応した近代教育を相対化することが可能となるだろう。さらにドゥルーズ＝ガタリが精神分析の批判から、その精神分析を乗り越える新しい分裂者分析の構築へと至ったのと並行して、既成の近代教育の批判から、その近代教育を乗り越える新しい教育理論の構築へと至ることができるだろう。

上に述べた企てに沿って、最初になすべきことは、ドゥルーズ＝ガタリの提示した第一の社会に相当する原始社会を把握し、その理解を基礎として原始社会の教育を考察するということである。その際、われわれは、資本主義の近代教育との差異化を図り、近代教育との異質性を示すために、原始社会における教育を特に「訓育」(dresser)と呼ぶことにする⁴⁾。

以上の観点から、本稿の第二章において、ドゥルーズ＝ガタリが社会理論に沿って、原始社会を図式的で整理された形で提示し、われわれには測り知れない原始社会の固有の有り様を明らかにする。そして第三章において、原始社会の把握を前提として、ドゥルーズ＝ガタリが明示的な形で扱うことのなかった原始社会の訓育について考えることにしたい。

2 『アンチ・オイディプス』における原始社会

(1) 欲望する諸機械

先にも述べたように、社会は欲望する諸機械を登録する。すなわち原始社会は、欲望する諸機械を土地の上に登録する。また専制国家は、欲望する諸機械を専制君主の上に登録する。さらに資本主義は、欲望する諸機械を資本の上に登録する。土地、専制君主、資本という欲望する諸機械が登録される土台は、「充実身体」(corps plein)と呼ばれている⁵⁾。このように社会は、充実身体を介して欲望する諸機械と密接な関係をもっている。したがってまず、欲望する諸機械とは何であるかについて確認してみよう。

欲望する諸機械をよりよく理解するために、次のような例を考えてみよう。子どもの口が、母の乳房に吸いつき、その乳房からミルクを摂取する場面を考えてみよう。ドゥルーズ＝ガタリは、

子どもの口や母の乳房といった器官のことを欲望する機械と呼んでいる。乳房と口が接続することから分かるように、一般に欲望する機械は、他の欲望する機械と接続し、欲望する諸機械という複数の形で存在している。すなわち欲望する諸機械は、接続的形態をもった二項機械なのである。さらに口と胃が接続し、胃と腸が接続し、腸と肛門が接続することから分かるように、二項機械は、線形状に伸びていくことになる⁶⁾。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、母の乳房と子どもの口の接続的関係において、母の乳房は、ミルクの流れを生産する。その乳房に接続された子どもの口は、乳房によって生産されたミルクの流れを「切断－採取」(coupure-prélèvement)する。このように一般に、欲望する諸機械の接続的形態において、欲望する諸機械の最初の機械が、流れを生産し、その機械に接続された第二の機械が、その流れを切断－採取するのである⁷⁾。

以上のような欲望する諸機械の接続的形態の別の例は、精神分析家の診療室にも精神病院にも隔離されることなく、自然の中で散歩し、山や水や草木や星々と触れ合い、接続する分裂者⁸⁾であり、また自然とともに遊牧し、自然と直接的に交流し、接続する狩猟者⁹⁾である。すなわち自然の諸要素と人間の身体の諸器官との諸々の接続である。したがって欲望する諸機械は、自然と人間とが、相対する二項として対立し、区別されるのではなく、両者が一体となり、接続するということを示している。

先にも述べたように、このような接続的形態の欲望する諸機械は、充実身体の上に登録される。ドゥルーズ＝ガタリによると、例えば、母の乳房と子どもの口の接続としての欲望する諸機械は、充実身体の上に、乳房と口との間に距離を置き、両者を離して登録される。母の乳房からミルクの流れを切断－採取した子どもの口はやがて、乳房から離れることになるだろう。すなわち母の乳房と子どもの口は、離接的な仕方でも登録されることになる。このように一般に、接続した欲望する諸機械は、充実身体の表面の上に、二つの諸機械が離れ、離接した仕方でも登録されるのである¹⁰⁾。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、母の乳房と子どもの口の離接的関係において、ミルクの流れは、母の乳房から子どもの口へと「切断－離脱」(coupure-détachement)し、口の中でストックされる。このように一般に、離接的に登録された二つの欲望する諸機械において、流れは、一方の機械から他方の機械へ切断－離脱するのである¹¹⁾。

以上のように接続的形態の欲望する諸機械は、充実身体の上に離接的に登録される。ではこの登録の後に何が起るだろうか。ドゥルーズ＝ガタリによると、例えば、充実身体の上での母の乳房と子どもの口との離接的登録の後において、子どもの口の中にストックしてあるミルクの流れの消費が起る。すなわち私という主体が、生じ、口の中にあるミルクの流れを味わい、消費する。そして主体は、この消費から快感を感じる。このように一般に、欲望する諸機械の登録の後には、主体が、立ち現れ、ストックしてある流れを消費するのである¹²⁾。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、主体による消費によって、ミルクの流れは、「切断－残余あるいは残りもの」(coupure-reste ou résidu)となる。このように一般に、主体による流れの消費は、その流れを切断－残余あるいは残りものという形態にするのである¹³⁾。

以上の記述を整理すれば次のようになる。まず接続的形態としての欲望する諸機械が、流れを生産する。次にその欲望する諸機械は、充実身体の上に離接的に登録される。さらに主体は、

流れを消費する。また生産には切断—採取が対応し、登録には切断—離脱が対応し、消費には切断—残余あるいは残りものが対応している。そしてこれらの「生産」(production)、「登録」(enregistrement)、「消費」(consommation)という一連の過程は、例えば母の乳房に吸いつく子どもの口、乳房から離れた口、口の中のミルクを味わう私によって端的に示されるのである。

(2) 原始社会

先に述べたように、原始社会においては、接続的形態としての欲望する諸機械は、土地という充実身体の上に登録される。例えば、自然の諸要素と自身の諸器官とを接続させている遊牧する狩猟者は、純粋な遊牧者ではあり得ず、必ず土地の上に野営することになる。すなわち自然の諸要素と狩猟者の諸器官は、土地の上に登録されることになる¹⁴⁾。このように原始社会においては、土地が、欲望する諸機械を登録する充実身体として選ばれているのである。ドゥルーズ＝ガタリによれば、「縁組」(alliance)は、土地の上に登録された欲望する諸機械と共存し、両立する。縁組とは、男と女間の婚姻的な関係であり、いわば諸人物間の横のつながりである。またその縁組と同時に「出自」(filiation)が登場することになる。出自とは、親と子間の血縁的な関係であり、いわば諸人物間の縦のつながりである。このように、登録された欲望する諸機械と共存し、両立する形で、土地の上に諸々の縁組と諸々の出自が現れることになる¹⁵⁾。

登録された欲望する諸機械は、人物という形態をとる以前の流れという強度的な状態をもっている。したがってドゥルーズ＝ガタリは、登録された欲望する諸機械を「強度的秩序」(ordre intensif)と呼んでいる。それに対して縁組と出自はそれぞれ、人物という外延的な形態をもっている。したがってドゥルーズ＝ガタリは、諸々の縁組と諸々の出自から成る体系を「外延的体系」(système extensif)と呼んでいる。したがって土地という充実身体の上には、強度的秩序としての登録された欲望する諸機械と、複数の縁組と複数の出自によって構成された外延的体系が存在するのである¹⁶⁾。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、外延的体系において、男と女とのつながりである縁組は、姉妹との近親相姦の禁止によって結ばれる。すなわち姉妹を別の男のために取っておき、自分は、姉妹とは別の女を配偶者として取るということによって、男女の関係である縁組は構成されるのである。それに対して親と子とのつながりである出自は、母との近親相姦の禁止によって作られる。すなわち母との近親相姦を許せば、母と子とは一体となり、親子は未分化となってしまふ。したがって母との近親相姦を禁止することによって、親と子とは区別され、親子の関係である出自が構成されることになるのである。このように、諸々の縁組と諸々の出自から成る外延的体系においては、姉妹や母との近親相姦の禁止が遵守されているのである¹⁷⁾。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、諸々の縁組と諸々の出自によって構成された外延的体系は、「同一の場所あるいは隣接した場所に住む人々の集団¹⁸⁾」、すなわち「地縁集団」(groupes locaux)¹⁹⁾である。この地縁集団としての外延的体系は、白人や宣教師や徴税人といった外延的体系に属さぬ諸々の植民者によって取り巻かれている。そして外延的体系は、それらの植民者たちを締め出し、それ自体で閉じられて、閉鎖した世界を作ることはない。外延的体系は、外部に存在している諸々の植民者に対して開かれている。すなわち外延的体系のメンバーは、植民者と争うにしろ、共謀するにしろ、その植民者と直接的に関係をもち、絡み合い、接続しているので

ある²⁰⁾。

以上の考察から、土地の充実身体の上には、次の三つの要素が存在することが示された。すなわち、強度的秩序としての登録された欲望する諸機械と、諸々の縁組と諸々の出自から成る外延的体系と、白人を中心とした植民者とが存在している。そして外延的体系と諸々の植民者、すなわち植民者たちと絡み合い、接続している外延的体系が、原始社会なのである。

このように土地の上には、登録された欲望する諸機械と原始社会とが存在する。そこで以下においてはまず、登録された欲望する諸機械と原始社会との関係を明らかにし、次にそれらの関係に基づいて、原始社会の中で組織される「土地の表象」(représentation territoriale)²¹⁾を明らかにする。これらの二つの次元、すなわち欲望する諸機械と原始社会の関係と、土地の表象とは、ドゥルーズ＝ガタリの原始社会の理論の中核を成しているのである。

(3) 欲望する諸機械と原始社会との関係

上に述べたように、土地の上には、強度的秩序としての登録された欲望する諸機械と、植民者たちに接続した外延的体系としての原始社会とが存在している。欲望する諸機械が一方の端にあり、原始社会が他方の端にある。そして両者は相互に隣接し、共存している関係にある。したがって欲望する諸機械は、原始社会の枠組みの中には収まりきらず、原始社会からはみ出し、逸脱した存在であると言える。すなわち欲望する諸機械は、原始社会の極限であり、原始社会には測り知れない存在であると言えるだろう。

では、このような欲望する諸機械と原始社会との間には、どのような関係が成立しているのだろうか。ドゥルーズ＝ガタリは次のように言う。「生物的一宇宙的な大きな記憶は、集合体のすべての試みを大洪水で押し流すことになるだろう²²⁾」。すなわち生物的一宇宙的な大きな記憶である欲望する諸機械は、原始社会を端から端まですべて飲み込み、原始社会を台無しにしようとしている。欲望する諸機械は、既成秩序としての原始社会を破壊し、転覆させようとする革命的で、反抗的な存在なのである²³⁾。

原始社会は、その社会の転覆を企てようとする危険な欲望する諸機械の力に屈してしまうわけではない。原始社会は、欲望する諸機械を抑制する。そして抑制的な原始社会は、自身の抑制する力を、ある審級に委任する。その審級とは、原始社会の中の縁組、すなわち縦の出自と相関するものとしての横の縁組である。原始社会によって抑制的な力を託された縁組は、革命的で反抗的な欲望する諸機械を抑圧することになるのである²⁴⁾。

原始社会が、欲望する諸機械を抑制し、それに続いて縁組が、欲望する諸機械を抑圧する。ところで抑制と抑圧との関係はどうなっているのか。ドゥルーズ＝ガタリによれば、抑制と抑圧は、それらの対象を等しくしている。すなわち抑制の対象も、抑圧の対象も等しく、欲望する諸機械なのである。しかし抑圧は、抑制に奉仕する手段である。すなわち抑制は、抑圧によって後押しされなければ、革命的で反抗的な欲望する諸機械を掌握し、押さえつけることはできない。抑制は、常に抑圧の存在と力を必要としているのである²⁵⁾。

では、縁組が欲望する諸機械に対して抑圧を行使すると、一体何が起こるのだろうか。ドゥルーズ＝ガタリによれば、縁組が欲望する諸機械を抑圧し、はね返すことによって、欲望する諸機械についての歪曲され、置き換えられたイメージが作り出されることになる。この抑圧される

ものについての歪曲され、置き換えられたイメージとは、姉妹や母との近親相姦である。欲望する諸機械についての偽りのイメージ、すなわち近親相姦というイメージは、抑圧によってでっちあげられたイメージであり、欲望する諸機械を覆い隠すことになる。すなわち縁組は、原始社会を破壊し、転覆させかねない危険な欲望する諸機械を抑圧し、後方に退かせ、その代わりに近親相姦という無害なイメージを作り出し、欲望する諸機械の前面に押し出すのである。したがって縁組による欲望する諸機械の抑圧という働きにおいては、異なる三つの審級が登場することになる。それらの三つの審級とは、抑圧される欲望する諸機械、抑圧する縁組、置き換えられたイメージとしての近親相姦である²⁶⁾。

上の第三の審級としての置き換えられたイメージ、つまり近親相姦について考えてみよう。先にも述べたように、諸々の縁組と諸々の出自によって構成された外延的体系において、姉妹との近親相姦の禁止によって、横の縁組は結ばれる。また母との近親相姦の禁止によって、縦の出自は構成される。すなわち外延的体系においては、姉妹や母との近親相姦は禁止されている。しかし、もしも近親相姦の行為をすればどうなるだろうか。近親相姦をすることによって、姉妹という人物は、その人物を指示する姉妹という呼び名を失い、また母という人物は、その人物を指示する母という呼び名を失う。近親相姦とは、その対象の人物と呼び名を同時に享受することであるが、近親相姦の行為は、その対象の呼び名を喪失させるから、その行為は、同時享受としての近親相姦とはなり得ない。したがって姉妹や母との近親相姦は、不可能なのである。置き換えられたイメージとしての近親相姦を犯しているひと、すなわち近親相姦の対象の人物と呼び名を同時に享受しているひとは、誰一人としていないのである²⁷⁾。

最後に、抑圧される欲望する諸機械、抑圧する縁組を包含する原始社会すなわち植民者たちと接続した外延的体系としての原始社会、置き換えられたイメージとしての近親相姦、これら三つの関係を図式的に示してみよう。ドゥルーズ＝ガタリによれば、一方の手前の此岸には、抑圧される欲望する諸機械がある。また他方の向こう側の彼岸には、抑圧する縁組を含む原始社会がある。さらに、抑圧の働きによって引き起こされ置き換えられたイメージとしての近親相姦が、此岸と彼岸を分ける境界線となっているのである。「近親相姦は純粋な境界線である。……(略)……境界線は、此岸にも彼岸にも存在していない。それは二つの側の間の境界線なのである²⁸⁾」。すなわち近親相姦が、境界線として中央を走り、その境界線の手前の此岸には欲望する諸機械があり、また境界線の向こう側の彼岸には外延的体系としての原始社会があるという図式が成り立つ。そしてひとは、此岸である欲望する諸機械にいるか、彼岸である外延的体系にいるかのいずれかなのである。ひとは、境界線としての近親相姦には決していないのである。なぜなら、どんなひとでも、対象の人物と名前の同時享受としての近親相姦を行うことができないからである²⁹⁾。

(4) 原始社会において組織される土地の表象

上に述べたように、登録された欲望する諸機械と原始社会との関係は、次のようになる。登録された欲望する諸機械は、原始社会によって抑制され、原始社会に含まれた縁組によって抑圧される。その抑制と抑圧の働きに関連して、三つの審級が登場する。すなわち、抑圧される登録された欲望する諸機械、原始社会の中の抑圧する縁組、置き換えられたイメージとしての近親相姦という三つの審級が、登場することになる。登録された欲望する諸機械と原始社会との関係に基

づき、それを前提にして、原始社会の中で組織される土地の表象が組織される。そこで以下において、この土地の表象について考えてみよう。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、原始社会は何よりもまず、口頭的であり、音声的である。すなわち原始社会は、音声言語（パロール）としての「音声」(voix)をもっているのである。音声とは、発せられ、聴取される分節化された音声言語である。しかし原始社会は、口頭的で音声的であるからといって、図柄としての「字体」(graphisme)を欠いているわけではない。原始社会は、図柄としての字体ももっているのである。字体とは、彫り板や石材や書物の上に書きこまれるのではなく、生身の人間の身体の上に刻みつけられる字体であり、例えば皮膚の上に刻まれた入れ墨やイニシエーションにおいて行われる身体変工である³⁰⁾。

では音声言語としての音声と図柄としての字体との関係について考えてみよう。それらの関係を考えるために、音声言語（パロール）と文字言語（エクリチュール）との関係について見てみよう。一般に文字言語は、音声言語の再現であり、音声言語に従属し、音声言語と一対一に対応していると考えられる。しかし原始社会における字体は、音声言語としての音声の忠実な再現ではなく、音声に従属せず、音声と一対一に対応していない。すなわち字体とは、音声から独立し、音声とは全く異質な図柄なのである。したがって原始社会は、音声言語としての音声をもつと同時に、その音声とは何の類似もなく、音声から完全に独立した図柄としての字体をもっているのである³¹⁾。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、人間の身体の上に刻みつけられた字体は、人間に与えられた記憶である。したがって人間の身体の上に字体を刻みつけることは、人間に記憶を作ることである。さらにこの記憶としての字体は、文化と言い換えることができる。文化は、「身体の中で動き、身体の上に刻みつけられ、身体をえぐる³²⁾」。したがって人間の身体の上に字体を刻みつけることは、人間に記憶を作り、文化を押しつけることなのである³³⁾。

さらに記憶であり文化である字体を刻みつけるということは、原始社会における人間と人間との関係を規定している。すなわち字体を刻みつける人間は、債権者として規定され、字体を刻みつけられる人間は、債務者として規定される。原始社会における人間と人間との関係は、交換関係ではなく、債権者と債務者によって形成された負債の関係なのである³⁴⁾。

上に述べたように、原始社会は、音声と字体という二つの異質な要素をもっている。それらの音声と字体とは、一対一に対応せず、相互に独立し、異質なままである。すなわち音声と字体との間には隔たりが存在している。その隔たりを埋めるのが、「眼」(œil)という知覚器官である。この眼という器官は、共同の眼あるいは神の眼であり、二つの機能をもっている。まず人間の身体の上には、字体が刻みつけられる。この刻みつけによって、人間の身体は苦痛を感じる。眼は、字体を刻みつけられた人間の身体の苦痛を見つめ、評価し、その苦痛から快樂という剰余価値を引き出す。すなわち人間の身体の苦痛は、その苦痛を見つめる眼にとっては快樂以外の何ものでもないのである。さらに眼は、音声を読むことなく、見るのである。なぜなら原始社会において、音声は、その音声を表す文字として紙の上に定着していないからである。このように共同の眼あるいは神の眼は、評価と視覚という二つの機能をもち、字体によって引き起こされた苦痛を評価の対象とし、また音声を視覚の対象とするのである³⁵⁾。

以上から原始社会は、音声言語としての音声、人間の身体の上に刻みつけられる図柄としての

字体、字体によって生じた人間の身体の苦痛を評価し、音声を見る眼という三つの要素をもって
いる。そしてこれらの三つの要素が共示し合う体系が、原始社会において組織された土地の表象
なのである³⁶⁾。

3 原始社会の訓育についての考察

以上において、『アンチ・オイディプス』で展開された原始社会の理論を考察した。そこでその
理論に基づき、原始社会の教育すなわち訓育について検討してみよう。

ドゥルーズ＝ガタリの原始社会の理論には、二つの次元がある。まず第一に、登録された欲望
する諸機械と原始社会との関係である。登録された欲望する諸機械は、原始社会によって抑制さ
れ、原始社会に含まれた縁組によって抑圧される。この抑制と抑圧とに関連して、抑圧される欲
望する諸機械、抑圧する縁組、置き換えられたイメージとしての近親相姦という三つの審級が登
場することになる。次に抑制と抑圧に基づいて、原始社会の中で組織される土地の表象である。
その土地の表象は、音声、字体、眼という三つの要素によって構成されている。以上の二つの次
元に応じて、原始社会における訓育を考察することができる。

まず第一の次元、すなわち登録された欲望する諸機械と原始社会との関係について考えてみよ
う。原始社会の中に含まれた縁組が、革命的で反抗的な欲望する諸機械を抑圧することによって、
既成秩序としての原始社会を維持している。したがって原始社会における訓育は、原始社会を転
覆させかねない欲望する諸機械の悪夢の抑圧を前提にし、条件にしていると考えられること
だろう。

次に第二の次元、すなわち原始社会において組織される土地の表象について考えてみよう。土
地の表象の第二の要素である字体は、音声から独立し、音声とは異質で自律した図柄であり、人
間の身体の上に刻みつけられる。その字体は、人間に与えられた記憶であり、文化でもある。し
たがって人間の身体の上に字体を刻みつけること、すなわち人間に記憶をつくり、文化を押しつ
けることを、原始社会における訓育として考えることができるだろう。実際、ドゥルーズ＝ガタ
リ自身も、この字体の刻みつけを原始社会の訓育として意識しており、字体の刻みつけのことを
「人間を訓育すること³⁷⁾」と言っている。このように原始社会における訓育は、人間の身体の上
に字体を刻みつけることであり、その訓育の目的は、人間に記憶と文化を与えることによって、人
間を一人前の人間（野生人³⁸⁾）とすることである。

また人間の身体の上に字体を刻みつけることは、原始社会における人間相互の関係を規定して
いる。すなわち字体を刻みつける人間は、債権者として規定され、身体に字体を刻みつけられる
人間は、債務者として規定される。上に述べたように、字体の刻みつけは、原始社会の訓育とし
て考えられるので、訓育における人間関係は、債権者と債務者との経済的關係として規定される。
実際、ドゥルーズ＝ガタリも、「債権者－債務者の関係の中で人間を形成すること³⁹⁾」という表現
を使っている。このように原始社会の訓育における人間関係は、相互的で閉じられた交換関係と
してではなく、交換関係に還元したり、回収したりすることのできない一方的で開かれた負債関
係として現れるのである。したがって原始社会の訓育における人間関係を、双方向な交換関係と
して考えることは誤りである。

このように、身体の上に字体を刻みつけられ、訓育された人間は、債務者となり、負い目を帯びることになる。この債務者としての人間は、今度は自分が債権者として他の人間の身体の上に字体を刻みつけ、訓育することによって、自身の身に帯びた負い目をはらうことができる。すなわち債権者と債務者との負債関係は、訓育の再生産を保証しているのである。

以上を整理すれば、原始社会の訓育の性格は次のようになる。原始社会の訓育は、欲望する諸機械に対する抑圧を条件としている。また原始社会の訓育は、人間の身体の上に、記憶であり文化である字体を刻みつけ、一人前の人間を作ることである。さらに原始社会の訓育における人間関係は、債権者と債務者とによって形成された一方的な負債関係として規定され、その負債関係が、訓育の絶えざる再生産を引き起こすのである。

(註)

- 1) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Édipe*, Minuit, 1972, pp. 11 f. (『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳, 河出書房新社, 1986年, 17-18頁) 拙稿「欲望する諸機械の中で生きる子ども」『京都大学大学院教育学研究科紀要』46号, 2000年。
- 2) *Ibid.*, pp. 29-31. (同書, 37-38頁)
- 3) *Ibid.*, pp. 40 f. (同書, 47-49頁)
- 4) *Ibid.*, p. 225. (同書, 232頁) ドゥルーズは, *Nietzsche et la philosophie*, P. U. F. 1962, pp. 152-158. (『ニーチェと哲学』足立和浩訳, 国文社, 1982年, 195-201頁) において, 訓育について論じている。また本稿で扱われる訓育は, 近代教育のカテゴリーの中に属する訓育ではなく, 近代教育のカテゴリーに属さず, 近代教育とは全く異なる原始社会の教育としての訓育である。
- 5) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Édipe*, pp. 16 f. (同書, 22-24頁)
- 6) *Ibid.*, pp. 11 f. (同書, 17-18頁)
- 7) *Ibid.*, pp. 43 f. (同書, 51-52頁)
- 8) *Ibid.*, pp. 7 f. (同書, 13-14頁)
- 9) *Ibid.*, pp. 173-175. (同書, 182-183頁)
- 10) *Ibid.*, pp. 17-19. (同書, 24-26頁)
- 11) *Ibid.*, pp. 46-48. (同書, 53-56頁) ドゥルーズ=ガタリは, 登録において, 流れを「連鎖」(chine) と言い換える。したがって流れが切断-離脱することは, 連鎖が切断-離脱することと同義である。
- 12) *Ibid.*, pp. 22 f. (同書, 29-30頁) ドゥルーズ=ガタリは, 消費において, 流れを「強度」(intensités) と言い換える。
- 13) *Ibid.*, pp. 48-50. (同書, 56-57頁)
- 14) *Ibid.*, pp. 173-175. (同書, 182-183頁)
- 15) *Ibid.*, pp. 181-183. (同書, 189-190頁) ドゥルーズ=ガタリは, 出自を二つの意味で使用している。一つは, 強度的な出自であり, 登録された欲望する諸機械を指し示している。もう一つは, 外延的な出自であり, 親と子との血縁的な関係を指し示している。本稿では, 混乱を避けるため, 出自は常に, 外延的な出自を指すものとし, 強度的な出自を意味する出自は, 使用しない。強度的な出自と登録された欲望する諸機械とは同義だから, 登録された欲望する諸機械で統一した。
- 16) *Ibid.*, pp. 183 f. (同書, 191-192頁)
- 17) *Ibid.*, pp. 187 f. (同書, 194-196頁)
- 18) *Ibid.*, p. 172. (同書, 181頁)
- 19) *Ibid.*, p. 174. (同書, 183頁)
- 20) *Ibid.*, pp. 198-200. (同書, 206-207頁)
- 21) *Ibid.*, pp. 217 f. (同書, 224-225頁)

- 22) *Ibid.*, p. 225. (同書, 231-232 頁)
 23) *Ibid.*, pp. 137-139. (同書, 146-147 頁)
 24) *Ibid.*, pp. 193-195. (同書, 201-203 頁)
 25) *Ibid.*, pp. 142 f. (同書, 150-151 頁)
 26) *Ibid.*, pp. 193-195. (同書, 201-203 頁)
 27) *Ibid.*, pp. 188-191. (同書, 196-199 頁)
 28) *Ibid.*, pp. 189 f. (同書, 197 頁)
 29) *Ibid.*, pp. 188-191. (同書, 196-199 頁)
 30) *Ibid.*, pp. 222-224. (同書, 229-231 頁)
 31) *Ibid.*, pp. 239 f. (同書, 245-246 頁)
 32) *Ibid.*, p. 170. (同書, 178 頁)
 33) *Ibid.*, pp. 169 f. (同書, 177-179 頁)
 34) *Ibid.*, pp. 224-226. (同書, 231-233 頁)
 35) *Ibid.*, pp. 240-242. (同書, 246-248 頁)
 36) 邦訳によれば, 表象には, 二つの次元が存在するという。第一の表象は, 抑圧される欲望する諸機械, 原始社会の中の抑圧する縁組, 抑圧によって引き起こされた近親相姦という三つを含む表象であり, 第二の表象は, 音声, 字体, 眼という三つを含む表象であるという。しかしドゥルーズ=ガタリにおいては常に, 表象と欲望する諸機械とは対立する概念であるから, 欲望する諸機械を含む表象という概念は, 奇妙である。本稿においては, 表象は, 音声, 字体, 眼から成る表象つまり土地の表象しかないとする。抑圧される欲望する諸機械, 抑圧する縁組, 抑圧によって引き起こされた近親相姦は, 表象を構成しないとする。
 また音声, 字体, 眼から成る土地の「表象」(représentation) に対し, 抑圧される登録された欲望する諸機械は, 「表象するもの」(représentant) と呼ばれ, 抑圧によって引き起こされた近親相姦は, 「表象されたもの」(représenté) と呼ばれる。
 37) *Ibid.*, p. 225. (同書, 232 頁)
 38) 野生人とは, 原始社会に対応する人間のことであり, 専制国家に対応する野蛮人, 資本主義に対応する文明人とは異質であることを示す。
 39) *Ibid.*, p. 225. (同書, 232 頁)

〈参 考 文 献〉

- Jean-Clet Martin, *Variations, La philosophie de Gilles Deleuze*, Payot, 1993.
 (『ドゥルーズ / 変奏』 毬藻充・黒川修司・加藤恵介訳, 松籟社, 1997 年)
 François Zourabichvili, *Deleuze, Une philosophie de l'événement*, P. U. F. 1994.
 (『ドゥルーズ・ひとつの出来事の哲学』 小沢秋広訳, 河出書房新社, 1997 年)
 Alain Badiou, *Deleuze*, Hachette, 1997.
 (『ドゥルーズ 存在の喧騒』 鈴木創士訳, 河出書房新社, 1998 年)
 市倉宏祐『現代フランス思想への誘い』 岩波書店, 1986 年。
 市倉宏祐・伊吹克己・菊地健三『ジル・ドゥルーズの試み』 北樹出版, 1994 年。
 浅田 彰『構造と力』 勁草書房, 1983 年。
 浅田 彰『逃走論』 筑摩書房, 1986 年。

(博士後期課程 3 回生, 臨床教育学講座)